

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第153号（2019年2月）

風に吹かれて（130）

白井啓治

・一滴の雨もなく躰も乾涸びて

もうどれぐらい雨もなく乾燥した日が続いているのだろうか。吾が躰も乾涸びてカラカラである。年末から歯のない上顎に歯肉炎が出来、口腔外科にかかったところ、炎症部の細胞を病理検査に出したあと切除手術することになったのであったが、検査の結果、かなり悪性の進行癌とわかった。これからPET検査などの結果を見て緊急手術となつてしまった。頸部のリンパ節の近くなので転移してなければいいがと思うが、さてどうなるかである。

菅原兄も癌治療で大変な思いをされているが、小生も仲良く仲間入りと言うことのようにだ。身内の心配をよそに、小生自身は、何処か他人事のような感覚で、己の身に起きていることを、ある種生きていることの愉快として眺めている。

かりにリンパに転移していて、余命判断のようなことがあっても、容易に受け入れて愉快に転嫁できるだけの覚悟は、今更ながらに出来ているのかたと自分を眺めているのが妙に笑えてしまう。

父親が、肝臓癌で亡くなったのは48歳。それで小生、親孝行のため50歳まで元気に働いてやろう

と決め、50歳になったら一切の仕事を止めて何もしない人生を送ろうと決めた。社会とのしがらみで、50歳で即現役引退はならなかったが、5年遅れ位でほぼ何もしない人生を手にした。

しかし、何もしない暮らしというのは、通常の欲も捨てることだから、なかなかの体力と精神力が必要となる。何よりも、何もしないという才能が必要で、普通の精神状態では一ヶ月と続くことは難しいと言える。

だが不思議なもので、何もしない日々の暮らしであっても、何とやる事が山のようにあるものだ。自分からは積極的に社会とのつながりを持つことはないのだが、立ち止まって振り返ると、ガラガラと紐に括り付けて厄介を引きずって歩いている。それが呆れるほど多いのである。それを見てつくづくに思った。何もやりたくないのならば、やる事が定められている勤めをすることが一番だと。それこそ自分の仕事を増やさなくても済ませられる地方の市役所などの職員が一番だろう。

こんなことを言うと、猛反発するだろう人達がいるだろうが、市などの職員には、普通の企業などに比べると仕事をしなくても済まされる正当な言い訳がごまんとあるのだ。ただし、キャリア組の国家公務員には決してなるべきではない。何もしないと程遠い生活になるから。

さてさて、我が癌の話から飛んだ横道にそれてしまったが、我が進行性の極悪歯肉癌は、歯肉から鼻腔、更には眼球、耳、咽頭へと疼きを連鎖させる。これが実に厄介である。我慢の出来ない疼きではあるが、何かに集中して志向することを大きく妨げる。これが辛い。

何もやらない筈であったのに、無駄にやる事を増やしてしまったような日常をつくってしまったものだから、入院するまでに人に渡せるように処理しておかねばならない。改めてやれやれよくもこんなにやる事を作ってしまったのかと呆れるばかりである。

「生なく滅びなし。敗戦もまさに風流。」とは己の重大な覚悟としてきたのであるが、進行性の癌の発見で、我が覚悟をどの程度愉しむことが出来るのだろうか、他人事的に興味津々にいる。実際の所、敗戦も風流と思えなければ、我が人生も淋しいものだなと思う。

まだ検査の途中なので、進行性の極悪癌がどの程度の進み具合なのか、悪さ具合なのかは分からないが、この紙面にも、これから先どの程度悪態をついていられるかは不問にして、我が敗戦を精々愉しむことにしたいと思っている。

神頭は鬼神と共にありとは先人たちは、よくぞ断言したものであると感心しきり。

年明けから、我がSNSに無責任なインチキ占いのような話があれこれ飛び込んで来たが、大運だという者や最凶だという者、さて吾が今年の運勢は如何にあらんや。運も愉快、凶も愉快なりである。

不完全な人類の進化

菅原茂美

中世から議論されたがC・ダーウィンによる「進化論」は、見事な取りまとめで、世界観に大きな変革をもたらした。しかし、宗教が絡んでは、ダーウィンも、きっぱり断言しきれない部分もあったに違いない。人類学の大御所たちは、キリスト教原理主義を簡単には捨て去らない。それゆえ特に「人類の進化」については、さすがのダーウィン先生も、たった1行だけ、お茶を濁したただけであった。

ダーウィンは学会の席上で「ところであなたの先祖がサルだとすれば、それは父方ですかそれとも母方ですか」となじられたという。

イギリスの王立考古学学会は、話にならない粗野で超古臭いものであったらしい。若い考古学者が、アフリカで人骨化石を発見し、学会に報告すると、高等な人類の化石が、あの野蛮なアフリカで発見されるなど、ありえない。もし人類の化石が発見されるなら、当然このイギリスあたりで見つかるに違いない。これがイギリス王立考古学学会の有様であったらしい。老練のガンコ会員。超護身的態度が目に見えるようだ。寄つてたかつて若い学者をつぶしにかかる世界。考えただけでもぞっとするようだ。

他の動植物と同様、人類についても、その進化については、複雑な経過をたどり、突如700万年前、直立二足歩行を始めた。足の親指は開いたまま。足の親指は他の4指と対向し、足での木の枝を掴みやすいようになっており、樹上生活を残したまま。本来人類の祖先は、熱帯の森林に棲んでいたが、気候変動により、森林が減少し、樹林の少ないサヴァンナへと進出した。それ以来直

立二足歩行をもって「人類誕生」とみなす。以来不安定な二足歩行で、天敵の猫科猛獣の襲撃をかわすのは、大変だったろう。

*

とにかく、サヴァンナにおいては、猛獣といかに対峙するかにかかっている。考えられるのはまずもって、脚を伸ばすこと。背を高くすること。恐らく二足歩行を始めた頃の身長は85cmくらいと考えられる。これでは草むらから頭が出ず、敵に臭いなどですぐ嗅ぎつけられ、生きていけない。背を伸ばして素早く敵を発見し、素早く逃げる事。逃げ切った者のみが子孫を残す。しかし背を伸ばせば、敵からも発見されやすくなるので、大きな矛盾を孕んでいる。

この頃の足を延ばしたいとする願望がいまだに我々の心理の深いところに内在しており、美女の世界コンクールの基準になっている。人類は700万年かけて身長が1.8m伸びた。

足が長くウエストが細ければ雄から見れば、この雌はまだ妊娠していない。俺の子を宿しうる可能性が高い。憧れの的となる。これが深層心理として働き、今日においても、ウエストの細さが美女の重要な要件となる。事実昔、パリやロンドンの社交界においては、ご婦人方はウエストを細く見せる為、季肋骨(二番下の肋骨・第13肋骨)を外科手術で除去するのが流行っていた時代があったといわれる。

人類化石の証拠は、大後頭孔の位置でわかる。四つ足歩行なら頭部は体幹の前にぶら下がるわけだが、直立二足歩行なら頭部は体幹の真上に移動する。それゆえ大後頭孔は頭蓋骨底の中央に移動する。これをもって人類と認識できる。人類誕生直後120万年ぐらひは、チンパンジーとの交配

が行われていたようである。それゆえ人類誕生を700万年前ではなく、600万年前とする学術書も多い。

なおチンパンジーとの交流は、染色体数が人類は23対(つい)46本になるが、チンパンジーは、24対48本のままなので、子供はできなくなる

●人類の進化史

◎共通祖先(類人猿) ↓ チンパンジー

← 700万年前

アウストラル・ピテックス

ボノボ

← 420万年

ホモ・ハビリス

← 80万年

ホモ・エレクトウス(原人) ↓ ネアンデルタール(旧人)

← 200万年

ホモ・サピエンス新人(20万年前)

さて最初の人類の祖先はアウストラル・ピテックスと呼ばれ、420万年も続いた。この間の人類進化は、微々たるもの。石斧は、100万年も全く変わらず。大脳の発達も微々たるもの。大脳容積の発達は、生存した年数に比例するものではない。人類の大脳は、700万年かけて、1000cc増えたが、その大部分は最後の、200万年ぐらひで増えたもので、それまでは真にスローテンポ。

さてアウストラル・ピテックスの後には、80万年間ホモ・ハビリスの時代である。ここで初めてホモという言葉が出てくるが、これは、「ヒト科」を意味する。80万年間のホモ・ハビリスの時代の後には、いよいよもって我々現生人類の親に当た

るホモ・エレクトウス原人が、今から、200万年前に登場する。北京原人や、ジャワ原人である。人類の進化は、このエレクトウスの時代に急速に進化した。

まず言葉を用い、道具を使い、火を使うようになる。火を用いるようになると、急速に脳容量および身長が拡大する。肉を大量に摂取できたからといわれる。

このような柔らかなものを食べるようになると、咬筋がそれほど強力でなくともよいようになる。即ち咬筋が付着する頭頂部の頑丈な「矢状稜（しじょうりよう）」が、だんだん縮小してくる。すると頭頂から重い蓋が取れると中身即ち大脳が思いっきり羽を伸ばして拡大でき、言語や道具の発明に大いに貢献できた。アウストラル・ピテクスには、この矢状稜が厳然として存在する。

はつきり人為的に火の使用が証拠立てられるのは40万年前からであるが、およそ200万年前ごろから炭化した骨が見られ、火が使われた形跡は残っている。但しこの炭化は、山火事などによるものか、人為的なものなのかの明確な証拠がない。

はつきり言って、この骨（矢状稜）がなくなったことが人類を飛躍的に躍進させた原動力と言える。ゴリラの雄には今でも、矢状稜は残っている。人は何かが（例…体毛）なくなると、それ以上に何かが発達する（例…汗腺）。

*

さて、いよいよ我らホモ・サピエンス新人の登場は、今からほぼ20万年前、エレクトウスからの分岐である。その前、10万年前に兄貴分の、ホモ・ネアンデルタール旧人が誕生し、サピエンスと数万年間、主にヨーロッパで同時代を

共有する。その間に両者は交流があり、ネアンデルタールから、青い目、金髪などを受け継いだ。そして現在、アフリカを除いた全人類にネアンデルタールの血が一樣に2%ぐらい残っているようである。

さてこのようにして生き残った人類だが、核兵器などという愚かで危険なオモチャを発明し、窮屈な生活を余儀なくされている。現在核兵器はほぼ15000発存在するが、前米国大統領オバマ氏の呼びかけで世界がその数を減らしているが、中国だけは逆に増やしている。何とも困った国だ。核兵器は競争の連続で、自分で自分を苦しめている。なんでこんな偽文明が発展するのか、さっぱりわからない。人類なんて何が万物の霊長か。神様の課長補佐ぐらいのつもりなど、よほど甘いし、チャンチャラおかしい品種に発展したものだ。極端な考えであるが、こんなに好戦的な人類ならば、いつそのこと、すべて新規巻き直しは、いかなるものであろうか。遺伝子組み換え技術を応用して、闘争的な遺伝子を取り払い、柔和な遺伝子に置き換えれば、間違いなく平和で穏やかな世界がやってくるに違いない。なにしろ闘争心は決して個人の問題ではなく遺伝子の問題なのであるから…。遺伝子組み換え技術は野菜や穀物だけじゃなく、人類そのものに応用しなくちゃ…。

国連で、非常に温和な人種のみを残す。もう頭脳はそれほど良くなくとも構わない。

文明の進化はもつともつと緩やかでよい。焦ったが故の今日みられるような偽の文明がはびこることになった。同じ仲間のゴリラ・チンパンジー・オランウータンが、ゆっくりと進化を続けるがゆえに、急激なポピュレーション（人口）増加も見られず、争いも少なく、穏やかな進化を続けている。

我々はそれを見習うべきである。私に言わせるなら、人類はゴリラ殿に教えを請いに修行に出たらよいと思っている。なんなら、ゴリラの遺伝子を譲り受けるために、人類は、染色体を2個増やして、ゴリラと同じ48にして、雑種を作らして貰い、人類の品種改良を遂げたらよいとさえ思っている。雑種の名前は当然「ゴリエンス」。ゴリラ×サピエンス（私の造語）が根拠。それくらいの事をやらないと人類の偽文明進化は止まらない。人類は決して万物の霊長でも何でも無い。私に言わせれば、霊長類からはみ出した落ちこぼれだ。

*

いかにして世界は、平和革命を成し遂げるか。課題は大きすぎて到底近寄れない状態だ。

国連事務総長は、越後の歌人良寛さまのような人に限る。私は本気になってそう考えている。トランプもプーチンもすべて落第。金や権力などに拘る人材は、掃き溜めのゴミよりもつと無価値。それにシッポを振って後をついていく人は、なおさら無価値。21世紀だ。人類はもうそろそろ、その辺に気が付いても、よさそうなものだ。

国家予算は、教育や社会保障費にどれだけあっても足りぬほど必要なのに、アホらしい軍事費に大量もっていかれてはたまったもんじゃない。そこで国連決議に従い、どの国も軍事費はゼロ。その代り、国連が何かあれば真っ先に駆け付け、紛争を解決する。国連の軍事費は各国GDPの例えば1%。

国連の主な業務は、貧困の解決。医療・福祉・教育の平等化。貿易・移民の自由化監視。そして、紛争の絶対的権力での解決。巨大な独裁政権は小さいうちに必ず根絶させる。極端なことを言えば、結婚は必ず異人種間でのみ許可される。そうすれ

ば戦争はなくなる。

こんな甘い事を並べて、頭、どうにかしてるんじゃないかと叱られるかもしれないが、これぐらいの事は、必ずやってほしい項目である。私は現在悪性リンパ腫という血液がんにやられているため、眼の神経が侵され片目を喪失している。両目を失わないため、脳内に放射線を浴びた。という事は認知症を早める事にも関係している。次々超甘いことを述べたのも一部認知症の始まりかも知れない。

人間いかに完璧を期そうとも、限度があることだし、老化もあることだし勘弁願いたい。

私は今、抗がん剤のため、白血球が極度に減少し、免疫不全の状態である。従って、私の寝室兼書斎は「隔離病棟」さながら。同居する長男が出張から帰った時など携帯で話をする始末。外部との接触はドクターストップ。早く解放されたいもの。

今年「亥年」の年男。7周目を終えたところ。

干支には何の関心もないが、日本の男性の平均寿命81歳はとうに過ぎた。これだけ馬齢を重ねて、俺は何の役にも立たないのが悔しいところ。せめて書き物で、何か社会に暗示を与え得れば幸甚と考え、何やら書き続けている。参考にはならないかもしれないが「へーそんな考えもあるのか!」ぐらいは感じ取っていただければ嬉しい話。

*

人類の進化は、現在進行中。決して、すでに頂点に達した訳ではない。ならばこれから先どんな方向に進むのか。兄貴分のネアンデルタール旧人が約27万年前で、種の寿命を終えた。サピエンスも同じ27万年前と仮定したら、残りはずかずあと7万年である。科学者は現状の環境汚染を続ける

場合、あと1万年がいいところ。7万年を逆算してみると、丁度、アフリカ北部からアラビア半島へ数百人で移住してきた、現在全人類の祖先に当たる冒険の第一歩の頃と同じ時点である。人類拡散のスタート時点である。いわば華々しい瞬間と言える。ネアンデルタールは、サピエンスに滅ぼされたのか、自然消滅したのか不明である。恐らく数の上で圧倒され、自然吸収されたものと思われる。これからの人類に何が起こるかわからないが、もしかして、ボノボかチンパンジーが勢力を伸ばして、彼らは我々サピエンスを滅ぼしにかかるかもしれない。

*

さてこれから7万年、いかなる7万年となる事やら:

しかし、決してすんなりと穏やかな世界平和が訪れるとは思わない。人類の猜疑心とはただならぬ強烈なものだ。ならばどうなるか。第3次、第4次世界大戦が考えられる。人類はそれほど馬鹿ではないと考えられるが、2度あったことは3度、4度と繰り返すに相違ない。日本・韓国など、中国、ロシアとアメリカとの中間にあつて戦場と化し、踏みにじられるに違いない。ヨーロッパとロシアも激しい戦場と化するに違いない。人類の未来はそんなに平穏なものではなからう・考えたくはないがそんな所に発展しそうな気がする。

奢れるもの久しからず。いずれチンパンジーかボノボにとつて代わる気がして仕様がなない。人類の歴史を見れば人類はそれほど利口な動物ではなさそう。ゴリラは超温厚派だから、世界制覇などの野望は持つまい。

すでにAI(人工頭脳)迄、考え出されたのだから後は運用次第。これまでのような争い事い世界

から、もつと穏やかな世界に落ち着けるよう期待するのみ。人類に幸あれ!!

地域に眠る埋もれた歴史(47)

木村 進

【総社宮の文化財】

常陸国総社宮が所有している文化財を少し紹介しましょう。

○ 漆皮軍配(伝 太田道灌奉納) 県指定文化財



太田道灌が使用していた軍配だという。

総長48.9 cm、最大幅19.1 cm、柄幅2.6 cmの鞆革製黒漆の軍配、表には朱漆で種子を大書している。

(総社宮のHPより)。寛文8年(1668)太田資宗、資次寄進銘のある箱に収められている。この太田道灌の軍扇を奉納したのは江戸時代初期に家康に仕えた譜代大名の「太田資宗(すけむね)」で、彼は太

田道灌の曾孫と言われている（確証はない）太田重正の子供である。もう一人の太田資次は資宗の次男である。ただ太田資宗の正妻は京都所司代を務めた板倉重宗の娘で、こちらは徳川家光などにも近い関係であったと思われる。水戸の徳川家などとも近かったようだ。

神社の説明では、永享12年（1440）5月に、太田道灌が奥州へ向かうにあたって武運を祈るため参拝し、戦に勝つて戻った折に軍配団扇一握と短冊二葉を寄進し、次のような短歌、

「曙の露は置くかも 神垣や 榊葉白き夏の夜の月」を詠んだとされ、道灌の子孫である太田資宗が道灌の寄進した軍配に感激し、軍配を納める金の梨地の笥（はこ）を作り、その蓋に由緒を書いて寛文8年（1668）4月に神社へ奉納したとされています。

そのため、これが、太田道灌がこの総社宮を訪れたとの証拠のようにも言われているが、実際にこの地に来たかどうかは判明していません。江戸時代に軍配とともに短冊も寄進されたのではないかと考えられます。

○ 漆皮軍配（伝 佐竹義宣奉納） 県指定文化財

安土桃山時代の作と推定され、府中城が落城し、佐竹家17代当主義昭の次男・義尚（よしひさ）が府中城主となったが、佐竹義宣は佐竹家19代当主で戦国時代の常陸国を統一した人物。恐らく、佐竹義尚が府中城主であった期間に奉納された軍配だと思います。県教育委員会の説明には、総長45.1 cm、最大幅18.0 cm、柄幅2.2 cmの鞆革製金漆の軍配、表には種子を中心に十二支

を表し、裏は朱漆し、佐竹氏の家紋の日輪を大書するとある。



ここには「日輪」と書かれているが、正式には「月丸」のはずである。日の丸を正式に名乗ることは当時できず、佐竹氏の家紋も月丸扇である。

○ 軍扇 入野左衛門尉平就景（無指定）

天文十八年奉納



左衛門尉（さえもんものじょう）は六位相当の官職で、鎌倉以降は武士たちに好んで使用されたという。

総社宮にはこれらの三武将の軍配が保存されている。

○ 隨身像（左大臣・右大臣） 市指定文化財



隋神門（総社宮で残っている建造物では一番古い）

江戸時代初期の1680年の作とされ、作者名も判明している。大きさは左大臣86.0 cm、右大臣84.5 cmの寄木作りである。

【青屋神社と青屋祭】

旧国府である石岡小学校のすぐ近く（北側）に建てられている。市民会館前を若宮神社側に少し進んだ通り沿いにある。この通りは市民会館へのバスの乗り入れができないというので拡張された。この神社もその時に建て直されたものかもしれない。比較的新しく感じた。

明治中期、旧石岡市役所の西の隣接地に小祠が

建てられ、「青屋神社」としたのがはじまりだという。



常陸国司は、都から着任すると鹿島神社に参拝するのがならわしであった。国司が鹿島神社に参拝するには、高浜から船で行くのが順路であったが、荒天で出航不能のときは、高浜のなぎさにススキ、マコモ、ヨシなどで青屋（仮屋）をつくり、そこから鹿島神社を遥拝し参拝にかえたという。遥拝式の直会（なほらい）にススキを箸にしてウドンを会食した。

青屋祭は民俗行事「青屋さま」のお祭（七月中旬頃で、ススキの箸でウドンを食べる習俗として受け継がれている）。

中世の青屋祭は、「常陸遺文」の「鹿島大宮祭、

高浜本宮青屋祭、府中総社宮青屋祭、大荒（大洗）磯崎青屋行事」の記録によれば、府中総社の宮祭の一つとして6月21日に高浜神社、大洗磯崎神社、鹿島神社などの津で、霞ヶ浦と鹿島灘の航海の安全と水産物の豊穰を神に祈願するため行われた。

また、「税所氏神事口伝（税所文書）によれば、青屋祭のとき、舟塚山古墳を青野喪山（あおののもやまと）呼び幣帛を供している。この鎮魂神事によって霞ヶ浦の航海の安全を祈ったのであろう。近世の青屋祭神事は、「常府古跡案内しるべ」によれば、青屋の馬場と呼ばれるこのあたりで行われた。6月20日の深夜、2人の者が青ススキ、細竹で青屋（仮屋）をつくる。神拝は6月21日の午後4時から始まり、公家装束の税所氏と小仁所氏が侍姿の大勢の供をつれて参拝する。この間、馬場では神馬を走らせた。神拝が終わると税所氏と小仁所氏は高浜に移り高浜神社に参拝した。（現地説明板）

これによれば、旧暦6月21日に神事が高浜で行われるようになり、これが高浜神社に発展します。また大掾氏が滅亡して、この祭りも途絶えたが、江戸時代になり府中の税所（さいしょ）家により復活したという。この祭りは青屋の馬場にて行なわれ、神馬に跨った総社神主を先頭に数名で高浜神社との間を往復したようです。

現在は7月にこの神社で青屋祭が行われており、総社宮により神事が執り行われています。

我が労音史（4）

木下明男

参加した労音運動からいろいろ学んだのですが、1970年からは実際に労音運動の活動家として参加してきました。この我が労音史では、自分が実践の中から学んだことを振り返り記述していきます。

1973年の社会情勢と音楽状況

国際世論とアメリカ国内の反戦運動の昂揚、ベトナム人民の不屈の闘いの結果、ベトナム戦争終結の和平協定が調印された。南米チリでは、CIAの後押しによる軍事クーデターが起き民主連合政府が崩壊しアジェンデ大統領が戦死した。アメリカのニクソン大統領がウォーターゲート事件により失脚。韓国元大統領金大中が日本の都内でKCIAにより拉致され韓国に連行された。ソ連ではサハロフがKGBに喚問され、ソルジェニツインがパリで「収容所列島」を発表しソ連への攻撃キャンペーンが拡大、反体制への締め付けが強化された。第4次中東戦争で、OPECは原油価格を21%引き上げにより第一次石油ショックが起き、政府は石油緊急対策要綱を決定し、市場では紙不足等によりトイレットペーパーの買い占めが大きなニュースになった。

春闘史上初の交通ゼネスト決まり68単産が参加し、20.1%（平均15000円）の賃上げを獲得。地価公示価格が前年比30.9%増と高騰し、国際通貨危機が再燃し為替市場が閉鎖される。また、熊本地裁は水俣裁判で患者の主張を全面的に認め、札幌地裁は「永沼ナイキ訴訟」で自衛隊違憲の判決を下す。

来日した海外演奏家は、イタリヤ歌劇・ベルリンフィル（カラヤン指揮）・レニングラードオーケス

トラ（ムラビンスキー指揮・ワルシャワフィル・ドレスデン歌劇場管弦楽団等。ソリストは、ミケランジェロ・Mアンドレ・ラドウルブルー・ロドリゴ（作曲家）等。音楽出版社協会が発足して、レコード会社の専属歌手による独占体制が打破される。日本演奏家協会がNHKに演奏量の改訂を申し入れ拗れ、紅白歌合戦ボイコットを決め危うく中止になる所だった。芸団協による芸能人年金制度が発足、日フィル協会の結成等音楽家の生活と権利擁護の要求が高まった。美空ひばりの暴力団癒着が問題化され、と揉め紅白歌合戦に不出場となった。

かぐや姫の「神田川」が安保闘争の挫折感を反映し、反体制フォーク等の民衆音楽運動から個人主義的生活に埋没していく社会情勢と生活様式の様変わりを象徴した曲と言われている。この年「うたごえ運動」の創始者関鑑子や古今亭志ん生（落語家・菊田一夫（劇作家・サトウハチロー、海外ではパブロカザルス・カレルアンチェルの各氏が逝去。

1973年の労音の動き

この年の第21回総会では「サークル活動を基礎に、会員の音楽要求に応える三ヶ年計画第二年度、二万名の労音建設を目標」を決定した。5、6、10、11月を拡大月間として設定し、12月には目標の2万名を達成し、前年より千名の会員増で、長年の会員減少に歯止めをかけ更なる前進への道に踏み出した。総会では、この時期の情勢に対応して運営制度の改善を規約に盛り込んだ（休会制度Ⅱ《例会に行かなくても退会にならない》と希望の例会に複数参加）そして入会金（50円）は変わらないが、例会規模による会費（リサイタルが800～1000円、オペラ・バレ

エは1400～1800円）制度です。（当時、封切り映画が700～800円、喫茶店での珈琲が250～280円、もりッパが150～200円）

組織運営の改善では、地域をブロックごとに再編し大ブロック委員会の設置（都心・東・西・南・北）専門部の復活で組織の整備改善を図った。これらは組織の肥大化に伴う運営のマンネリ化を改め、労音運動の初心に返り、サークルや地域活動のエネルギーで活性化することを目的に実施。大ブロックごとに作られた委員会を中心に地域例会が組織され、会員による手作りの例会が始められた。これにより新しい会員の掘り起こしは進んだが、一方組織活動が地域に分散し全体での集中する力が弱体した。人口の増加が著しい三多摩地域強化のため、立川駅近くに出張所を開設。

創立20周年の年頭に労音会館で「新年の集い」を開催し、早乙女勝元の記念講演、いずみたく・小林恭（バレエ）・新谷のり子他の参加して、模擬店・バザー・合唱交流など400名の参加で交流を深めた。秋には清瀬保二・山根銀二・岩淵竜太郎・松浦豊明・外山雄三・五十嵐喜芳・加藤盟・すぎやまこういち他の参加で「創立20周年祝賀会」を開催、委員と会員150名が交歓した。専門家からは苦言も含めた激励が寄せられる。

全国統一企画として、ミュージカル死神（藤田敏雄・作・演出 いずみたく・作曲・西村晃・今陽子・主演）ミュージカル青春の歯車、オペラ「かくも長き不在」、オペラ「トスカ」（外山雄三・指揮・中村俊一・演出・成田絵智子・丹羽勝海・田島好一・出演）公演が進められる。死神は落語を素材として、人間の生と死をテーマに風刺で描き、マスコミでも話題になり音楽・演劇界に波紋を投げかけた。トスカは理解し易い歌唱・筋立てに力点を置き、迫力のある内容となり

オペラ界に反響を呼び起こし、初めてオペラに接する会員にも好評だった。

クラシック例会のバレエ例会では、「バフチサライの泉」小林恭バレエ、「ジゼル」谷桃子バレエ。オーケストラ例会では、日フィル（渡辺曉雄 福村芳一指揮・岡村喬生独唱）東フィル（ピンスカス指揮）東響（秋山和慶指揮）を取り組み、とくにフジTVからの一方的専属打ち切りに対する支援が広がった。年末恒例の「第九」では250人の合唱団で都響渡邊曉雄指揮、400人（2例会）で成功させた。リサイタル関係では、バイオリン（江藤俊哉、藤川真弓、紅林こずえ）チェロ（井上頼豊、岩崎洗）ピアノ（館野泉、小林道夫）声楽（伊藤京子、中沢桂と栗林義信）室内楽（巖本真理弦楽四重奏団）。海外演奏家は、プラハ少年少女合唱団、ハラシエビツチ・ラローチャ（ピエロ、ファルー（ギター）を取り上げた。

ポピュラー音楽は、ザ・ピーナツ・尾崎紀世彦・菅原洋一・ダークダックス・デュークエイセス・トワエモア・五木ひろし・布施明。雪村いずみ・加藤登紀子・和田あき子・森山良子・岸洋子他、井上陽水・モップス・RCサクセション・海援隊・泉谷しげる・シャデラックス・赤い鳥・チェリッシュ等オーケストラの例会が若年層に広がる。特筆する企画としては、シャデラックスの「緑の地球よ、どこへ行く」（いずみたく作曲）は、公害問題を警告し労音らしい企画。英とロザンナは炎の画家ゴッホの素顔を描いた「炎のバラード」（作曲・出門英）の創作初演は注目を集めた。ビッグバンドの「原信夫とシャープ＆フラッツ」「見砂直照と東京キューバンボーイズ」の共演は話題を呼ぶ。アメリカのレンチャンドラーは、ピートシガー以来の感動を呼ぶ例会。劇団四季の買い取り公演には「アプローズ」「越路吹雪リサイタル」「イエスキリスト・

スーパースター」実施され要求を満たした。

伝統芸能例会では、金春流の企画で「娘道成寺」の演目で深い感動を得た。近松門左衛門没後50年と民族楽団「ふきの会」主催者平井澄子の音楽生活50周年の記念例会として、「とりべ山」「心中天の網島」と「唐人お吉」(タカラテル作)が演ぜられ、平井の至芸の力に圧倒された。文楽では、新作「女の平和」(ギリシャ劇・内村直也台本)は伝統芸能の継承と発展にとり有益な例会でした。労音寄席では、正蔵・馬生・志ん朝・春蝶等が得意の演目で登場。

第19回全国会議(京都で開催)には154労音700名の参加で開催、3ヶ年計画の第2年度の総括と「労音運動の基本任務」の全文改訂が行われた。既に議案書が制作され(7月)各地労音では討議が開始されていた。全国会議の2週間前突然幹事会議(東京・大阪・全国)が開かれ「新基本任務」が上程され、全国大会で討議されることになった。東京労音は「一週間前の臨時運営委員会で、新基本任務を全国に提案する事を決議した。改編内容の大きな点、元の基本任務には「労音は…音楽文化を創造することを目的としている」と規定しており、この規定は「労音運動が広範な人々の多様な音楽要求を実現する大衆的で民主的な鑑賞運動である」という本来の目的を曖昧にしたもので、運動上の誤りや目的からの逸脱の根源になっていた…」東京労音は創立以来の三つのスローガンから、「国民音楽を育成創造しよう」が削除されることに…。この件を巡り、労音の内部から不満が続出し運営機関に混乱が生じた。

新基本任務は
「私たち労音運動は、「良い音楽を安く、多くの人びとに！」のスローガンのもとに、音楽を愛好す

る広範な人びとの要求を組織し、良い音楽を普及することを目的とした大衆的で、民主的な鑑賞運動です。労音は、音楽を愛好する人なら、誰でもが個人として参加できます。私たちは、広く市民のあいだにサークルを基礎とした組織をつくり、運営は民主的におこなわれます。会員は、情操と教養をゆたかにするような過去と現在にわたる内外の音楽の鑑賞を通じて、相互に人間的な成長をめざします。私たちは目的を達成するために、多くの音楽専門家等と協力していきます。」

東京労音では、この問題がタブー化され、その後もキチンとした総括放されなかった。近県労音(東京・東海・関東)と合同研究集会が労音会館で開催、三木稔や佐々木光氏他数人の専門家の助言を得て、新しい情勢にどう立ち向かうか討論を深めた。

例会外の活動は、入場税訴訟は最高裁の係争中であつたが、労音運動の現在の力量と裁判の見通しから見て、訴訟を取り下げ撤廃運動(32000名の署名)に集中して取り組むことにし、労演と共同して国会請願にむかった。また、東京都芸術文化会館(池袋駅前)設立の促進署名95000人分を都議会に提出。第10回世界青年学生平和友好祭(ベルリン開催)に全国の労音から7名(東京から2名)を派遣した。

1973年の私

この年は今までの労音運動が様々な点から見直された時期で、東京労音の各地域でも討議が深められた。東京労音では、東京経済大学のI教授が委員長として就任、そして私もその一画副委員長に就任する。この頃の労音の内部は、いくつかの潮流に分かれて、この時期の運営委員会も深夜ま

でに至り、纏まった方針を出すことが難しかった時期です。委員長の方針で、新基本任務についての議論は回避し続け、当面の課題に議論に集中させた。滞納入場税を根本的に解決するため、元の事務局跡地(信濃町)を沖縄県に売却することに決めた。返還された沖縄と土地売却契約のため沖縄に派遣される、沖縄はまだ返還間もないので、まだアメリカの施政権が…。また海洋博なども開催されていて日本への変換景気で活気があった。

サークル地域から体力のある労音を作り上げるために、地域活動が重要視され地域例会等がブロックごとに企画された。ミュージカル「青春の歯車」の再演や新谷のり子と「木枯らしの手紙」の創作地域例会が取り組まれたのもこの頃でした、また、地域からの民族音楽教室が出来たのもこの頃、山中湖での夏の友好祭の実行委員長等も務め、地域活動の先頭に立って頑張っていました。

つづく



お祝い 新庁舎オープン

兼平智恵子

東日本大震災で一部利用不能になり建て替えを行っていた石岡市本庁舎が、新庁舎として一月四日オープンしました。

またしても石岡駅の壁面に続いて庁舎外観が筑波山のイメージという。

「歴史の里いしおか」に相応しい、かつて常陸国の国府が置かれた時代、中心的な建物として現在の石岡小学校敷地内に建てられていた国庁のイメージを描いていた私にとつて残念でなりません。果たしてどのような経緯で筑波山になったのか、外観について市民への呼びかけがあったのでしょうか。

その時代、常陸国分僧寺、常陸国分尼寺、鉄製品を扱う官営工房(鹿の子遺跡)の一部復元をと。ふるさと歴史館を訪れる皆様方の望む声が少なくない。そして石岡はこんな素晴らしい歴史がありながら歴史を大事にしていけないとの声も多い。

その他、旧石岡市内に集中する重要な建物の群の跡の明記も不十分。

「どうして歴史館(石岡市ふるさと歴史館)が小学校の敷地内にあるのか?入りづらい」などの声に低姿勢で応対するのが精一杯の現状です。

全国的に自分達の住む歴史を大切に掘り起こし街おこしをしている風潮が高まっているゆえに、訪れる皆さんが感じるのかもしれない。

しかし、石岡市民俗資料館から、石岡市ふるさと歴史館となり四年余り、三か月ごと入れ替えの企画展が行われ、石岡のお宝物が公開されるようになってから、特に石岡市民の皆さん、そして市外、県外の皆さんの来館が確実に増えている事が数字にあらわれ、嬉しい結果となっています。

市内中心街に点在する看板建築をはじめ登録文化財を中心として、現在も商売を続けておられる方々、空家となっている地主の方、観光協会の方々、市役所の方々、そして市民の皆さん一丸となつてレトロな町並を再現し、訪れる皆さんを暖かくお迎えし、お迎えする自分達も一緒に楽しめる町並になつてほしいと、切に思います。

特に元氣なシニアの皆さんのご協力とご活躍が望まれ、そして石岡のおまつりを愛する気迫のある旧町内の皆さん、その気迫のご協力が、町の発展に繋がる事と信じています。

いよいよ恒例の石岡雛巡りが二月一六日〜三月三日まで開催されます。

毎回来しみのまちかど情報センターの歴史絵巻情景飾り、石岡駅前西口の文化伝承館での十段飾り、観光物産展の丁子屋の二階まで華やかな雛さまたち、常陸総社宮神楽殿の雛さまたち、各商店街の微笑みの雛さまたちのお出迎え、ご期待ください。ふるさと歴史館でも珍しい、掛け軸に描かれた雛さまたちや大正後半頃の雛様が登場する予定になつて居ります。二月五日からはじまります、方言「茨城弁」の企画展と併せてのご来館お待ちしております。

石岡市ふるさと歴史館は月曜日休館(月、祭日の場合、火、休館)、他毎日十時〜一六時半まで開館しています。

○今日の男女山

雲さぶとんに お雛様気分

智恵子

小川川尻から紅葉へ

伊東弓子

今日は十一月廿五日、二日後の十一月廿七日は旧暦十月廿日、御留川の大切な神事の行われた日である。高崎、夷宮(えびすのみや 現・西の宮神社)前で大綱おろしが行われた。神官、郡奉行所役人、他集い水中の鳥居の両脇に分れ、御留川行事の二張りの大綱引きが行われた。左は大綱の岡引き子、右は車(かぐらさん)により鯉の大漁を願って網をひく、沖の二艘の網舟が網の引き具合を整え、合図をおくるところの絵図と、大場伊衛門の当日の日記を載せた。寒さに向かって漁を始める漁師たちの苦勞を知って欲しいと思ったからだ。今、鯉は一匹も捕れないようだ。水中の鳥居は昭和三十年代にはあったが、水辺は埋め立てられゲートボール場や盆踊りを楽しむ地域の広場になった。今は消防小屋、駐車場、ごみ置場となつている。「夷宮より東には家はなかった」という話も漁場の跡だったことを物語っているように思う。



公民館に集合、小川小学校校舎の後側から入った。来春には町の南側にある小川南中学校跡地に移転し、橘小学校と一緒に新しい小川南小学校に生れ変わる。ここがこの跡も町の中心として町民の集う所であってほしい。一昨年のサミットで園部城の発足当時の歴史を知った。取手山との戦いの時も町を守り、確り時を刻んできた。小宮山楓軒の力を入れた稽医館、その後小川郷校が出来、近郷近在から集まってきた若い力は、時代をも動かす力となっていたことを思いながら、遠くに目をやると玉里地域が西から南に連なり、遠くに筑波山、目の前の水田は遠い昔は霞ヶ浦の一部であり、その名残りの園部川は、湖に向かって流れている。小川の町も商売が成り立たず、寂しい姿・形が多くなつたと嘆く声が多いが、愚痴るだけではだめだ。先ず町の歴史を知る処から始め、崩れていく形や去っていく時間をいとおしんで欲しい。壊れていく町は、そこに住む人々が見捨てているからだと思う。

小川城跡からの眺めに時間が掛かって、待っている学芸員さんの所へ走るように向かった。よく出来た模型で小川町、特に活気ある小川河岸の様子が目に入った。学芸員さんの説明はより深く、社会情勢の影響を受けた地域の浮き沈みを理解出来るものだった。水戸藩の運送手段を考えた時、小川河岸、下吉影河岸、上吉影、勘十郎堀、涸沼、巴川、北浦、そして霞ヶ浦へと関連している通路を知る為に、絵図の幾つかを資料とした。紙の上での説明では充分じゃない、このシリーズをまとめ、現地を歩くのもいいだろう等と、考えたが口にせずにいる。稽医館の案内もよく出来ている。道を開いた本間一族の姿を改めて知った。その草分けをした小宮山楓軒の力は偉大なものだったこ

とも確認した。

紅葉（もみじ）へ向かう途中、（この地名への関心をもち始めた頃の事を思い出していた）現在、家の前を馳る「紅葉・石岡線」いつ頃から呼んでいただろう。大人になってからだだろうか。「何で、こんなきれいな名前なんだろう」と不思議に思っていた。小・中学校の頃は「新道」と、よんでいて、車も減多に通らない、偶にトラックが、一日に数える程のバスが通るだけだった。昭和三十年代前半、上高崎外れから高架入口の「あけぼの保育園」に、幼な児が二、三人で歩いていったと聞く。同じ頃、高崎の子たちが小学生と一緒に長道中を上玉里にある「玉里保育園」迄歩いて行った時代だった。大人達は何の心配もせずいた。そういう時代だったといえればそれ迄、私は二十代に入つたばかり、その頃この道は昭和の初めにくつた道路、百里ッ原に飛行場が出来る為だったと分った。結婚してバスで通うようになってから「石岡から紅葉の方へ行く道だから、そうよぶそうだ」それで「紅葉・石岡線」と知り、その後「小川の先に紅葉という所があり、水戸藩の南郡の郡奉行所があった所だ」ということが分った。その時は知識として分つたにすぎず、そこを尋ねたのはずつと後、二十年前、池上先生が連れてきてくださった時、今迄のぼおつとしていたものがすべて分った。その後、紅葉村、紅葉新田などの存在を知った。知ることの意味が長い時間かかって得られたことを改めて思う。

奉行所跡には公民館があり、ごみ集収場もあってこの地域の人達の集る場所のようだ。上吉影が西の方に見える。田の続く草紅葉の間を巴川が流れている。すぐ近くに「河岸」と呼ぶ家があると教えてくれた人がいた。代々の奉行が勤めた場所

として形はないが、小宮山楓軒を称える大きな碑だけが残っている。それに地名に相応しい楓の木が、可愛い葉を散らしていた。参加している二人の子は拾いながら喜び合っている。御留川の知らせも此処から出、口情、訴えもここまで足を運んだのだろう。

鉾田町から茨城町へ長い距離を走った。車六台の移動には心配していたつもりだったが、曲り角の説明不十分の為、一寸した行き違いがあった。曲り角に一人立つとか、携帯電話を利用するとか、智慧を働かせるべきだった。現代生活に必要な看板は大きく色彩も華やかだが、歴史・名所案内の実に小さくお粗末なものだと、今回は強く感じた。畑の先に木々が連なっている。右は涸沼方面、左は鉾田へと繋がる筈だった堀の一部が隠れているかのように木々に覆われている。深い勘十郎堀は落葉で水面が埋もれているが、時々舞い落ちる葉に男たちの声が聞えるようだ。怪我をした者もいたろう。死んだ人もいたろう。女達の嘆きも押し潰しながら進められた工事、現代だって現場で働く者は辛いことが多いようだ。「越訴」という題名で、上吉影出身の義理の兄が書いた本を紹介しておいた。地元の文書（もんじょ）から地元の声をもとに書かれている。つい一週間前、鉾田の田山家の子孫の人から、先祖がこの事業に四千両の寄附をした話を聞いた。こういう一つ一つが史実を明らかにするのだと改めて思い、文書（もんじょ）を大切にしていきたいと願う。堀跡が何ヶ所かあるようだから、そのうちゆっくり尋ねて確かめておきたいものだ。

一周できた喜びを全員で会食するわけだったが、場所がとれなかったこと、時間がおくれたことで二手に分れての食事となった。とんかめ組・すし

組にわかれ疲れをいやし、腹を満たし、会話も弾んだという報告に安心した。

食後、とんかめ組は今日の奔命だった「川尻川」を見に行くことにした。湖水に面している小川地区は狭い範囲だが、「川尻川」は園部川河口東側一帯と記されている所をみると広く芦やまこまがおい茂り、よい漁場だったという。鯉やフナの子卵場所としてもよい所だったようだ。八木蒔沖で鯉が沢山とれたという文書もあり、又園部川から御留川に出た小川船頭が起こしたいざこざもこの辺が舞台となっていた。コンクリートで固められた土手の片隅に、小川八景の一つ「川尻の落雁」の碑が建っている。目を閉じて水辺も水田も空の境のない自由な雁の姿を想像していると、すごい警笛が鳴った。車の置き方が悪いと言わんばかりの女の車、通れない訳でもないのに・・・と最後に厭な思いをしたが、御留川の一周を成し遂げた喜びを少人数で湛え合って別れた。

今回は多くの参加者に恵まれた。子供二人の参加は特に嬉しい限りだった。一つ一つに興味を素直に表わし、メモをとる姿も真剣そのものだった。御留川を歩く会もこんな状況が多くなることを願いたい。この子達の心の中に残っていくものは何だろう、と思うと私の気持ちも喜びに溢れた。今回は積極的に意見をだしてくれた人が多く気持ちのよい歩会だった。

ああ！ やってきてよかった。

さあ！ これからどこへ向かっていこう。

西金砂山

小林幸枝

常陸太田市の北西部に、西金砂山という標高418mの山頂に西金砂神社があります。山頂の

境内にはサワラとイチヨウの御神木を始め、大木が茂り、豊かな山の自然に包まれています。

社殿は山岳信仰の古社らしく荘厳な佇まいを見せています。この本殿が建つ山頂からの眺めは素晴らしく、心が晴れ渡るような清浄なる常陸の霊山です。

西金砂神社は、社伝によると、延暦二十五年（806）三月に宝珠上人によって創建され、後に慈覚大師により中興され、古くは金砂大権現と呼ばれた天台宗の山岳寺院でした。平安から戦国時代には、常陸太田を拠点とした佐竹氏から守護神として崇敬され、江戸時代には朱印地を受領し、水戸藩主からも崇敬されました。

西金砂神社の境内は、茨城百景に選ばれた美しい景観です。本殿の建つ山頂は、西側が約100mもの落差がある展望の断崖で、西金砂山は、かつて佐竹氏の金砂城があり天然の要害となつています。山頂からの景観は、久慈川の中流域を囲む幾重にも重なる山並や、はるか遠くに霞む日光や那須の高山、一帯の山林には落葉広葉樹が多く、深緑や紅葉の色どりも見事です。

常陸の国の神秘と絶景の霊山と言われていますが、実際の景観はのどかな感じで美しさの際立つところでした。



父のこと（6）

菊地孝夫

せっかく書く機会が与えられたのに、ここ半年余りたつてなぜか筆が進まない。

事実を書くというのはいかに苦しい作業で、まして家族のこととなればなおさらである。まさに身を切るような思いで書かねばならないのは当然だと分かっていてもやはり苦しい。自分を飾って書きたくなるのは当然。けれどもそれではただの作り話になってしまう。事実というのは時に醜いものだ。批判をすればそれが逆に自分にはね返ってくることもある。

バラ色の未来ばかり語っていたのでは何もよくはならない。あえて汚れた過去をあらわにするほうがよい。この国は、それをきっちり検証してこなかったから今になってさまざまな問題が起きていく。

憲法改正だのオリンピックだの、はっきり言うて今の時代にどうでもいいことをやっているからこんな事態になるのだ。

この原稿を改稿している途中で、痛ましいニュースが流れてきた。

父親が小学生の娘を死なせたという。このての事件はたびたび報道されるがそのたびに親の言い訳として使われるのが「躰」なる言葉である。

私はもともと好き嫌いが激しかったので、この「しつけ」という言葉が大嫌いである。スポーツ界でも指導・しつけ、と称して暴力が振るわれる。

「お前たちを教育してやる！」という「上から目線」の思い上がった心が透けて見えてしまう。どちらに対しても教育行政の立場から強く介入するケースはまれである。いじめにしても同じである。これらはすべて同根だと思う。

親に対しては親権に対する民事不介入の原則があつて、限界があるという。

暴力をふるうスポーツ指導員・教員に対してはその実績に、ひれ伏してしまふ。間違つて、オリンピックで金メダルでもとうろうものなら、神様扱いで、引退後も評論家として、タレントとしてテレビにでてくる。

高校野球で優勝すれば地元の名士である。ばかりでなく、全くジャンル違いの時事問題に、わかつたような怪説を加えている。

しまいには国会議員にまでなつてしまふ。

教育委員会などが腰が引けるのも無理はない。

モンスターペアレントが存在し、また行政に圧力をかける文句たれの存在も大きい。

さてどうしたらいいか？ 答えは黒澤明の名作「生きる」にある。公務員の採用試験で、この映画の感想文を書かせるというのはどうか？

またニュースでは生活保護世帯が増えたとか減つたという話題がときどき流れる。生活保護世帯の水準にある貧しい世帯の実数はその数倍有る。

困窮しているその人たちがなぜ保護の申請をしないのかというと、ひとつには審査が厳しいのと、生活保護を受けることへの抵抗感があることである。法律の条文にうたわれている当然の権利であるのに受給することがさも悪いこと、不名誉なことという宣伝があらさまになされている。

「セーフティネット」という考えがあつて、様々な理由でやむなく困窮している人々を助ける最後の手段がある。そのひとつが生活保護（生保）である。

これは行政がしなければならぬ大事な仕事であるのに、それをきちんと果たしていない。

通り一遍の、言い訳のような不十分な施策をお

こなつてよしとしている。不正受給者の存在を必要に大きく取り上げている。審査基準も国の指導の下、どんどん厳しくなっている。支給額も引き下げられ続けている。

茨城県の現在の最低賃金は時給1千円にも満たない。低い県では八百円を切る。一か月働いても12万円ほど。そこから交通費や保険・税金などが引かれると、十万円に満たない。ときには生活保護費よりさらに低い所得水準となつてしまふ。

茨城県の場合、生活保護費の支給額は個人の場合、7万円を切る。医療費・家賃そのほかで支援がなされる。

国民年金の支給額は、ほぼ同じくらい。老齡になつて年金を受給すると、当然のように生活保護費は打ち切られる。

営々として働き続けた結果、様々な理由で収入が途絶え、最後に行政に頼つて何が悪いのか？ さんざつばら税金を取つておいて、いざ払う段になつたらこれを渋ること甚だしい。

該当する人は、勇気をもつて申請することだ。間違つても「サラ金」や「闇金」に頼つてはいけない。ましてや自殺・一家心中などをしてはいけない。

所管官庁の厚労省で、統計データの出鱈目が発覚した。この官庁は、バブル期に不必要な大型施設を全国に建設し、維持費に困つて二束三文でたたき売つた曰くつき官庁である。

予算がないというのが全く根拠のない、言い訳であるというのがこのことでも証明される。

立て続けに起こる災害で、増え続ける被災者。数か月たつても依然として避難所暮らしの人が大勢いる。それはなぜか。金に余裕のある人はさつ

さと家を建てるかして避難所を出ていく。

自治体の用意する少しばかりの被災者向け住宅は「抽選」で、すべての人が入れるわけではない。

有効な策として、例えば数百戸に及ぶ国会議員宿舎をすべて被災者に解放し、自分たちはかわりにプレハブに住むようにしてはどうか。議員は選挙区に帰れば別に自宅があるのだから、多少の不便はこのさい甘受すべきである。

こんな簡単なことがなぜできないかと言えば、貧困層は票にはなるが、それよりも巨額の政治献金をくれる富裕層のほうがより大事だというのが本音だからだ。

今年十月には、消費税の増税が予定されている。その前に、参議院選挙がある。

大東亜戦争の開戦前、税金の不足を補うため、大蔵省の担当者はサラリーマンから天引きするという手を思いついた。この制度の導入により莫大な税収増が簡単になつた。

それ以来80年余りだったが、サラリーマンは必要経費も認められず、不当に高い税金を払い続けることになる。他国に比べ税率は低いというが、消費税の導入によつて今後も税率は天井知らずにどんどん上がつてゆくことだろう。

増税分は福祉・社会保障の拡充にあてるといつているが、このような約束は空手形で守られたためしがない。

かつてはこれらの税金は、ことごとく軍備に振り向けられたという事実を忘れっぽい国民はすっかり忘れてしまつてゐる。軍事實費は多い時は国家予算の半分ほどに達した。今の価値に直すと、ざつと100兆円ほど。このうち50兆円が軍事費に振り向けられた。

現在でも「防衛費」は5兆円を超える巨額であ

る。どんな産業でも、規模が1兆円を超えると、一人歩きする。そうになると、どんどん自己増殖してゆく。その産業に人口が集中する。当然、政治の世界に対する発言力も増してゆく。

防衛費が1兆円を超えたのはいつのことだろう。「GDP1パーセント枠」がなくなってしまったのは、昭和の時代のことか？

古代中国では、武人が政治に介入するのを避けるため、常に文人の下身分とした。

科挙の制度でも、文官のほうが武官より身分が上であった。今でいう文民統制である。

古代中国の人ですら、軍人が政治に介入することの弊害を、長い間の経験として知っていたのである。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし (24)

さと女

2019年あけましておめでとうございませう。今年もよろしく願います……

●お正月……

夕べの新年会に続き今夜も新年会、日中はそれぞれ阿見のアウトレットに出かけたり、八郷散策やら初詣やら出かけ、帰る家族、来る家族入れ替わり、少々飲みすぎの模様、正月明けからはみんな再び忙しい日常、まあ、少々オオメニ見るか、と云うところです。そして、午前中には2泊した家族が帰って行き、その後遅い昼食を済ませた長男夫妻が帰って行った。後はいつもの時間が流れ

ている。昨夜は皆でフラワーパークのイルミネーションを見に行き、100万球の光の世界の中を散策した。帰り際、売店で買った花の福袋、鉢植えの花の他買い物券800円+300円、飴玉2袋、入場券2枚入って3000円だった。ほくほくの気分です。帰って来た。皆、無事着きました。電話でホッとした……。

●年賀状……

年末何かと気忙しく年賀状を書くどころか、はがきを買うのも忘れてしまった。1日にたくさんのはがきが届いた。返事は3ヶ日が過ぎてからにするしかない？というわけで今朝9時になると同時にはがきを買って求めた。裏は印刷にして刷り上がったものから住所は手書きにして、こんな時に茶飲み友達が来訪、1時間程世間話をする。どうやら、夕方には郵便局のポストに入れることが出来た、それでやっとホッとする事が出来た。

●バードウォッチングや……

穏やかな暖かな正月、予定の事を済ませながらランチはオリーブさんへ。この時期の楽しみは小鳥さん達に会えること。今日は沢山の小鳥たちが柿の御馳走を見つけ飛び交っていた。メジロ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、小枝を飛び交いながら次々と降りて来る。ガラス越しに何時まで見ても飽きない。何とも可愛いものです。自宅から少し歩き、豊後荘玄關前のポストに、手紙を出しついでにヤギさんにご挨拶、黒ヤギさんは不在だった。

●辻イチゴ団地……

友人のSさんの直売所へ……。朝早くから一粒ずつ丹念にイチゴを摘み、パックに詰めそのパックを箱に並べ、シールを貼りお客さんに届ける。寄る年波には勝てず、今年は大分ハウスの数を減らした様だ。無理をすると後にひびく、だから無理はしない事にしたんだ。話をしている間にもイチゴを求め、次々お客さんが訪れる。お客さんと話をするのも楽しみの1つだよ。と、今日はふるさと納税の箱詰めを終わらせた所だった。昨年にも続きいばらキッスの人気が凄いらしい……

●苦手な季節？……

北風が冷たい一日だった、朝早くに外の用事を済ませ、朝食の用意をしていると、くしゃみが連発し、鼻水がどつと流れた。その状態がずっと続いている。早くも杉花粉が飛んでいるのかな？あたりを見回すと杉林の色が大分変っている、嫌な季節が来てしまった。コロちゃんにも花粉症があるのかな、そんなコロちゃん、ゆっくりゆつくり散歩。猫も見守ってくれている。お正月を迎えてから元気です。心臓の薬が効いているのかな？

●エコクラフト①……

暮れにおつまみ入れを創ろうと始めたエコクラフト、出来上がらずに年を越していた。今日はその仕上げのためカフェオリーブに集まった。皆真剣に取り組み綺麗に出来上がり後はニス塗るだけ。自分で作った物は嬉しい……2個目も作りたいという方も。

●エコクラフト②……

わいわいエコクラフトで何を作るか？みんな

考えた。半日くらいで簡単に出来るもの・・・まあ、可愛い小物入れはどうだろう？底を作るのが少し難しいがみんなで教え合って、最高齢88歳の元気なチヨちゃんに負けない様に・・・。

●エコラフト③・・・

朝から冷たい北風が吹き荒れ、その上カラカラ天気。雨が待たれます。今日は最近定例になつて来たエコラフト、陽だまりのカフェでみんな熱心に手が動きました。苦労した最初の作品はニスが塗られ出来上がり、今回は小さな可愛い籠。次回が楽しみです・・・。

●池の氷・・・

連日の寒さ、ここ数日マイナス10度とか15度とか。我が家の近くにある池も全面結氷、鳥さん達が氷のうえを歩いていきます。私の子供の頃田んぼは冬でも水が張ってあり、氷が張ったのを見つけると、みんなで滑って遊んだのを思い出します。此の池でも厚氷が張った時滑った記憶があります。今思うと恐ろしい事です。アオサギや白鷺が年中飛んでいます・・・。

●栗・・・

昨年から冷凍庫の中で出番を待っていた栗、お正月栗きんとんを作ろうと大事にしていたのだったが、出番がなかった。今日はその栗を蒸してみた、さすが栗農家さんの栗、1粒1粒が大きく、ほくほくとして甘い、ついつい手が出てしまふ・・・。外では、葉を落とした銀杏の木が子猫たちの遊び場、時につっぺん迄昇つてしまい、中々降りてこられず親猫が迎えに来たりしている。白とぶちとグレーの子猫が遊んでいる。

●イオン土浦へ・・・

久しぶりに寒さが和らぎ、池の水も8割溶けていた。予定が変更になり急遽土浦イオンへ行くことに、目的は二人共メガネを作る、映画を観る、そして本を買う事。朝早いのにメガネ屋(JIN)は混んでいた、それでも12時過ぎには終り、ホットドックとコーヒを手に12時半からの映画に間に合った。映画はボヘミアンラプソディ、伝説のロックバンド「クイーン」のドラマ、とにかく凄かった、クライマックスには思わず涙が。映画の後には本屋さんで文庫本のまとめ買い・・・店の中は振袖姿の方が大勢歩いていて。そうか、成人式なのだ・・・。

●東筑波ユートピア①・・・

今日は新年の挨拶がてら東筑波ユートピアへ、小川社長は不在だったが、新しく入った責任者？になる方とお話が出来た。東武動物園にいたらしい。3月にはクラウドファンディングにより集まった資金(500万円?)で作るイノシシ牧場の散歩道も開設となる様です。ユートピアを出ようとしたとき楽市さんから夕食のお誘いがあり、ログハウスへ、こちらも新年の挨拶を。暫くぶりに近況報告などを・・・。

●東筑波ユートピア②・・・

先週ユートピアを訪ねた時、社長不在だったため再度訪ねた。テレビ番組の志村動物園で日本一お客の来ない動物園として継続して放映されているため、来園者も増えている様子。今日も若い方達が次々訪れていた。イノシシ牧場も工事中、

社長の許可を得て工事現場近くまで歩いて行った。そこは急こう配の坂道。此処から見た筑波山や八郷盆地が氣に要り45年前動物園を作ったと話していた。イノシシ牧場の散歩道が完成する頃この山は桜で満開ではないでしょうか？

●竹細工・・・

今年のはじめての竹細工の日、休憩時間のお茶菓子にサツマイモを蒸して持つて行く。Yさんは、おしやれにリンゴパイなどを焼いて持つてきた。今日はずっと鉋を使ってひたすら竹と格闘、竹ひごは一本も使える物は出来なかった。やつていれば必ず出来るようになるからの慰めで、沢山の竹を持つて帰っては来たが、果たしてどうなることやら・・・。

●ランチコンサート・・・

今日は楽しみなライブの日、今回はギターとボーカル(パーカッション)により、昭和の懐かしい曲をギターの伴奏で歌ってくれた。ギターでソロも数曲、後半はプロジェクターに歌詞が映し出され歌声喫茶になった。今度いつ来てくれるのかなという声も聞こえた。演奏の後はママ手作りのランチを頂きながらのお喋り、楽しい時間はあっという間に過ぎて・・・。

●夕焼け・・・

今日も陽が沈んだ。何があっても夜が来て朝が来る、新年の挨拶がてら数ヶ月ぶりに友人を尋ねようと電話をするとご主人の沈んだ声、女房長期入院している・・・と、其の後一言二言話をして電話を切ったが、何ともその後気分がすぐれない。元気になるのを願うばかり・・・。

●新年会・・・

カラカラ天気の青空、今宵はライオンズの家
族新年会、ゆりの郷のマイクロバスが迎えに来て
くれ、温泉でリラックスしてから宴会。3つのお
めでとうで花束を谷島さんに贈呈。(県会議員当選、
誕生日、春の選抜高校野球 21世紀杯甲子園初出場)
賑やかに交流出来ました・・・。

●雪雲・・・

今朝は大分冷え込んだ。空がどんより重たい
なと思ったら曇となり一瞬真っ白になった。こん
なに寒いのお隣の牛さん、2日続けて子牛が誕
生。保温対策大変だよと言っていた。親牛たちは
背中にも布を被って、池の水は全面氷って、こん
な中でもコロの散歩は欠かせない、家の中で排泄
は絶対しないので、そのおかげで今日は蠟梅の畑
を見つけた・・・。

《風の呟き》

南米遺跡半島

打田昇三

古過ぎる話なので証明は困難だと思うが、今か
ら二万一千年ほど前に、アジア大陸からベーリン
グ海峡を越えてアメリカ大陸へ移住した勇敢な人
類が居たという。その方々は現地で狩猟生活をし
ていたが、地球の温暖化で獲物が少なくなったた
で、玉蜀黍などの栽培で定住し各地に村落を形成
していった。紀元前千二百年頃にはメキシコ湾岸
の温暖な地域に「オルメカ文化」と呼ばれる原初
のものが起こり、集約農耕で生活し神殿建築や土
偶、巨石像などの遺跡を残したと言う。その考察

から彼らは暦と数字などを用いていたことが推定
されている。

オルメカ文化は徐々に発展し、神聖文字や数字
を用いて太陽暦を記録し其れを石碑に残すなど紀
元前四百年頃から紀元前後にかけてメキシコ湾岸
のユカタン半島に起こった古典期の「マヤ文明」
に大きな影響を与えたと言われておりメキシコ
のコバー、ウシュマル、バレンケヤ、グアテマラ
のティカル、セイバル、キリグアなどに当時の遺
跡が残されている。

そのうちに宗教的感覚か、或いは天文学的な発
想かは知らないが、ジャングルを切り開いて壮大
なピラミッドを築くことが行われるようになり、
西暦七百年頃を最盛期に現存するチチェンイツツ
ア、トゥルムなど、いわゆる後古典期のマヤ文明
と呼ばれる建造物が造られたようである。ところ
が、其の頃にメキシコ中央高原部に居た種族トル
テカ族がユカタン半島に侵入して、折角の建造物
なども破壊されたと思われる。その所為でマヤ文
明の遺跡はジャングルに埋もれた上に、西暦一五
〇二年・頼まれもしないのにコロンブスがスペイ
ンから来てホンジュラスに上陸したから、ユカタ
ン半島は欧州諸国の支配地と化してしまった。

其の後、一五一一年には、コロンブスの真似を
したのか？パナマから現在ドミニカ共和国の首
都になっているサントドミンゴへ向かった帆船が、
途中で座礁して動けなくなった。乗組員のうち十
数人は餓死したり現地住民に捕らえられて生贄に
されたけれども二名だけが助かり現地住民に転身
したという。現地住民による野蛮な風習は根強く
残ってはいたが一方では侵入して来たヨーロッパ
人による奴隷狩りも行われていたことになる。

一五一七年にはキューバの探検家フランシス

コ・エルナンデス・コルドバが奴隷狩りの目的で
やって来た。其処で高度な文明を目撃したから此
の話が基で一五一八年にキューバの総督ドン・デ
イエゴ・ベラスケスが遠征隊を組織してユカタン
半島に向かい、古典期マヤ文明の「トゥルムの塔」
などを発見したのである。

一五一九年には生贄から逃れ、土着していた
一人が探検支援業を営業しており、やって来た征
服者フエルナンド・コルテス(スペイン貴族)の
ガイドを務めている。その所為で全般的に「メソ
アメリカ文明」と呼ばれるメキシコ、グアテマラ、
ベリーズなどに展開していた遺跡群が観光地化し
てしまったが、本来は密林地帯であるから見学に
気軽な旅は望めず、成田からだとなロスアンゼルス
ⅡメキシコシティⅡグアテマラシティⅡフロレス
(ジャングル都市)：さらにジープで奥地へ。
つまり、観光とは言えない厳しい旅が続くことにな
る。



熱帯病の恐怖

菅原茂美

アインシュタインは、第2次世界大戦後、『3次世界大戦があるとすれば、どんな兵器が使われるでしょうか?』との質問に対し、『それはわからないが、第4次大戦があれば、恐らく石と棍棒でしよう』と答えたという。

「奢れる者久しからず」と昔から言われるが、人類は現在、環境を汚染・破壊してまでも、利那の繁栄に溺れている。しかし、このままだければ、必ず衰亡の時がやってくるに違いない。恐らく3次大戦では、核兵器や生物・化学兵器に、AI（人工頭脳）を駆使した想像もつかない強力兵器により、壊滅的な戦争が展開する事であろう。愚かな人類の終末が見えてくる。そしてわずかに生き残った人類は、性懲りもなく、再び闘いを起こし、第4次大戦になれば、原始時代の石ころや棍棒で争うに違いない。アインシュタインは言ったのである。正に人間の「業」というか、とても、万物の霊長などと云うのは、おこまがしい。

そこで私が思うには、第3次世界大戦を起こさないのが第一であるが、もし起こるならその前に、もつと凄まじい恐慌がやってくるに違いない。それは人類の、今の今が良ければそれでよいとする利那主義の成れの果ての「地球温暖化」に歯止めが利かず、トランプ大統領領みたい、温暖化は、偽科学のデッチアゲだ! などと言っていると、金星の様に、温暖化ガスの二酸化炭素（ CO_2 ）が96.5%（地球は0.4%）。地表温度が464℃（地球は15℃）みたいになったら、生物は全滅。灼熱の砂漠と化するに相違ない。

ホモ・サピエンスとは、「知性を持った人間」という意味である。知性があるのなら、地球が荒

廃する前に、温暖化に歯止めをかけ、早々に清浄化する義務がある。温暖化の殆どは、人類がなした愚行の結果であり、罰として人類滅亡もやむを得ないが、何の罪もない他の生物までも巻き込むのは絶対に避けなければならない。即ち人類とは知性があるどころか超愚劣で野蛮な動物という事になる。

ニュージーランドは、人口よりも羊の数の方が多い。羊のゲップやオナラのメタンガスは温暖化の大きな要因とし、対策費を産む為、羊にかなり高い税金をかけているという。

*

地球温暖化による被害は、低い陸地の水没だけではない。熱帯の凶悪な伝染病が、人口密度の高い中緯度地帯でも大流行する事である。訳は、蚊などの吸血昆虫が高緯度地帯でも棲息可能となるからである。シベリアでマラリアが大流行! そんな事が現実となる。

【恐怖の熱帯病】（5例列記したが他にも多数あり）

●「マラリア」高熱・血球破壊。全世界で現在、年2億2千万人感染。死亡者数は、44万5千人。日本でも1946年の2万8千人をピークに「土着マラリア」が存在。現在は、水田地帯の環境変化などで、媒介昆虫のハマダラカが棲息しなくなった為、なくなった。

●「エボラ出血熱」主にアフリカで流行。全身出血。死亡率は90%。多くの哺乳類に感染するが、人類が最終宿主。節足動物が媒介。

●「ラッサ熱」げっ歯類が自然宿主。人類の致死率5%。主に西アフリカ。呼吸困難・全身皮下出血。毎年10万人感染、5千人が死亡。

●「デング熱」主に南北緯度35度以内の全熱帯地方で流行。毎年110か国で1億人が感染。症状は軽

いが、偶に出血など内臓障害で、死亡する事もある。媒介者はネッタイシマカ。他の哺乳類にも感染するが、人類が主。

●「黄熱病」アフリカと中南米の風土病。別名「黒吐病」。病原体・フラビウイルス。ネッタイシマカが媒介。症状は嘔吐・腎障害・下血・黄疸。死亡率50%。野口英世は、本病研究中に感染死亡。アフリカ出身のタイラーは、本病ワクチンを開発、ノーベル賞受賞。

*

3次大戦が起こる前に、温暖化により熱帯病が地球全土に広がる可能性がある。ならばその対策を国連への寄付金等により、緊急に事前策を講じるべきだ。何はさておき大企業の決算を見ると、各社とも巨大な留保金を保持している。想定外の出費もあり得るので、ある程度の留保金は必須だろうが社員給料を上げるのが先だろう。しかし環境汚染などの為、人類生残も危うい今日、その対策として各国のGDPに応じた「寄付の義務化」を強行すべきである。智慧ある人類ならば、今の今を乗り切ればそれでよいとするのは甘すぎる。子孫が安定した生活ができるよう、21世紀の我々は、真剣に考えるべきである。

【特別企画】

打田昇三の平家物語

巻第九・(三・1)

堅固な城は「難攻不落」と称され、文字で見れば絶対に落ちないことになるのだが「攻撃に勝る防御なし」と言われるとふらくもふらく。戦国時代には攻め難い城の攻略に水攻めや兵糧攻め

(補給路の遮断)などを用いたらしいが、豊臣秀吉の示唆で佐竹に攻められた石岡の城のように「日本三名古城」に入ると言われても城下町ごと焼かれれば消防署が無かった時代であるから落城する前に焼滅する。平家物語の時代にも武士道には反すると思うが、火攻めは使ったようである。

寿永二年夏に城を捨てた訳では無いが、源氏勢の脅威から一度は集団疎開で都を離れた平家は本拠地の西国で勢力を挽回し、木曾義仲が京都で好き勝手をしている隙に神戸に城砦を築いて徐々に京都奪還を目指した。一方、都から遠く離れた関東では、伊豆で挙兵して見事に敗れ房総半島に逃げた筈の源頼朝が、現地の平氏系豪族である上総介(かずさのすけ)広常や千葉常胤(つねたね)らに擁護されて次第に勢力を増し遂に鎌倉に腰を据えてしまった。そうなると思えば、有力武士団は競って源氏に付き一大勢力に発展する。一ノ谷に攻め込んできたのは其の関東勢なのである。

今回、書く部分は一の谷を戦場とした源平の合戦であり、結果として源氏軍が勝つ訳であるから敗れた平家方武将の最後などを描いた場面が多くなる。平家が滅亡する壇ノ浦合戦は巻第十一に出てくるが此の章段は平家滅亡の序章とも言える内容になっている。此の時に平家が擁っていた安徳天皇は一の谷では無く沖の船上に居たらしいから平家全員が船に乗って居れば、陸路を来た源氏は手出しが出来ないから、無駄な合戦はしなくても済んだことになるのだが：

実は、或る歴史書に依れば後白河法皇が平家に使者を出して「(源氏と)和睦の仲介を進めているから戦闘態勢を解いて待つように。」命じていたと言う。平家側は其れを信じて防御を緩めていたと思われる。それが史実ならば平家は騙されたこ

とになるが、騙したのが天皇を後見する法皇では文句も言えなかった。平気で嘘をつく法皇が居たとなると大日本帝国も詐欺師並みになる。

坂落(さかおとし)のこと

此の章段は裏手から攻めた源義経の「鶴越逆落とし」に始まる激戦の話であるけれども、無理をして危険な逆落としをしたことで源氏軍は勝てたようで、平家陣営に到達した源義経は得意の「放火」でも平家軍を苦しめた。平家側から言わせれば源氏軍は既に述べたように「騙し討ち」のような攻撃を仕掛けたのであるから裏の崖など使わずに正々堂々と来い！と言いたかったであろう。

義経軍が攻め込む前には源氏方の秩父(桓武平氏・平良文流)、足利(平将門を討った秀郷流)、三浦(坂東平氏)、鎌倉(平氏系、梶原・大庭の祖)、さらに小武士団では武蔵七党の猪俣、児玉、野井与、横山、西、都築、私(きさいち)の兵たちが表門側に攻め掛け源平両軍の乱戦となった。双方が入れ替え名のり合い、喚き叫ぶ声が山々に響き、馬の駆け違う音は雷の如く、飛び交う矢は雨が降るようであった。双方に負傷者を担いで退く者あり、軽傷で戦い続ける者あり、深い傷で絶命する者あり、敵に組んで馬から落ち敵と刺し違えて死する者もあり、敵の首を取り、敵に首を取られ、両軍の形勢は互角と見えたが、此の俣の状態では攻撃を仕掛けた源氏軍が不利と思われた。

其の頃には搦め手(一の谷の背後)である鶴越えに迂回した源義経の軍勢が崖の淵に到達していたけれども予想以上に急勾配なので、義経は別にして従う武士たちは躊躇(ためら)っていた。

すると付近に住んでいた三頭の鹿が人馬に驚いて崖を駆け下った。実際には転落したのかも知れないが：当然、鹿は平家の陣中に落ちる。

城内の兵たちが「里近くに居る鹿は人間を見て山中に逃げ込む筈なのに落ちて来るのは怪しい。是は背後の山から源氏軍が攻めて来るのではないか？」と騒いでいる所に伊予国の住人で橘氏系の武知武者所清教が出てきて「何であれ、敵方の方向から出て来たものを逃がす訳にはいかない！」と二頭の雄鹿を射て雌鹿は逃がしてやった。是を見て大將格の越中前司盛俊が「罪作りの上に無駄な矢を使ったものよ！鹿を射た矢で十人の敵が防げたものを」とたしなめた。

一方、崖上の義経は谷底に展開する平家の陣を見下ろしていたが「試しに馬を落としてみよう」と数頭の馬を選んで鞍を着けたまま降下させた。

選ばれた馬は嫌な顔をしたが逃げる訳にもいかず骨折転落する馬と、何とか無事に着地が出来た馬とに分かれた。一頭は敵将・越中前司の屋形に落ちて大きく身ぶるいをしてから名乗りを上げた。是を上から眺めていた義経は「馬どもは、乗り手が注意して降ろせば怪我をする事も無いであろう。

此の義経が手本を示すからついて参れ！」と強引に命じ三十騎程で降りて行った。残る訳にはいかない武士たちも一斉に降りたのだが、後から行く者の馬具の先端が先に行く者の鎧兜に当たるほどの坂道である。崖であるから小石混じりの砂地で、一同は坂を下りると言うよりも砂に流されるようにして百メートルほどを下り、傾斜地途中の平場に到着した。その先に未だ急坂が待っている。

其処で躊躇してはみたが戻ることは不可能であり先にも行けず、誰もが「此処で立ち往生か！」と諦めていた。すると三浦一族の佐原十郎義連が

「我らは三浦半島で暮らしているから鳥一羽を追つても朝夕にこういう崖を通ることがある。此処は三浦の馬場同然である！」と言い放ち、真つ先に駆け下つて行つた。是に励まされるように全員が「えい！えい！」と掛け声をかけ馬に元氣をつけて下りて行つたのだが、下を見れば恐ろしい。殆どの者が目を瞑つて（馬はどうか知らないが）下りたのであるからとても人間技とは思えない。鬼神の仕業のように見えたのである。

命懸けで崖を降つて来た場所は敵の陣である。一同は息をつく間もなく関（とき）の声を上げた。それが三千余騎のものであるが、山彦の音響効果もあり十万の軍勢が押し寄せたように響き渡る。それに加えて村上判官代康国の手の者が直ぐに平家陣営に火を付けたので、平家軍は兵士の立場で護るか消防隊員で防ぐか考える暇もない。折から風が強くなり、平家基地の建造物には次々と火が移つていった。是が平家陣の裏手のことであり表口では既に本格的な戦闘が行われていたのであるから誰が考えても沖の船に逃れるしかない。

其の時に平家方は多くの船を浜辺に置いたのであるが戦場からの離脱であるから乗船券は要らないとしても我先に乗ろうとする者が押しかける。乗る者は鎧兜を身に着けているから重い。船の定員は完全武装した武士を基準に決められている訳では無い。浜辺から少し漕ぎ出したところで大型の船が三艘も沈んでしまった。その為に「身分の高い者は乗せるが下級の武士・兵士は乗せるな！」という人道主義にそつた？命令が出た。その命令を実行する為に船に取り付く下級の者は味方に追われた。それでも船に取り付く者は肩を斬られ、腕を斬り落とされた。一の谷近くの海岸には合戦の死者では無くて平家軍に斬られた平家軍の死傷

者が無数に転がることになった。

その様な状態であつたから、其れまでに多くの武功を立てていて敵に後を見せなかつた能登守教経が何を思つたか「薄墨」または「薄黒」と言う自分の愛馬に乗つて早々と西国へ落ちて行つた。讃岐の八島へ渡つたようである。なお、平教経はやがて平家滅亡の際の合戦で活躍をするから「卑怯者」などとは言えない。

越中前司最後（えつちゅうのぜんじさい）のこと

今迄の章段に何度か登場している平家の武将・越中前司盛俊の最後を語る章段である。此の条文の中でも本人が説明しているように平家歴代の武将であるが血筋は平家に繋がる。平清盛の系統は石岡に所縁のある平国香の曾孫（正度）から正衡―正盛―忠盛…と続くのであるが越中前司盛俊は正衡の兄弟（季衡）の家系から家臣となり代々、平家の腹心として重きをなしていたのである。

前章段に続き一の谷の戦場では大手（生田の森）及び浜の手（一の谷、須磨海岸方面）とも攻め寄せた武蔵・相模の兵たちが（別に彼らだけでは無いと思うが原文には其の様に書いてある）命を惜しまず攻撃を繰り返していた。平家方大手の大將軍である新中納言（平知盛）は東から来る源氏の大軍を相手に戦つていた。そこに山の急斜面を伝つて攻撃して来る敵（源氏軍）の児玉党から使者が送られて来て（合戦の最中に敵に使者を送るのも珍しいが）其の者が言うことには「貴方様は昨年に武蔵国司をされておられました。私も児玉党は武蔵国の住人ですから、その御縁で申し上げます。どうか後ろを振り返つてご覧ください…」

激戦の最中で振り返る余裕などはないのだが、かつての領民であつた武士が言うことなので知盛は戦う相手を突き放して後方を見た。其処に見えたのは平家の本陣が燃え上がり黒煙が押し迫ってくる光景である。平知盛は驚き「ああ、何と言うことだ。西の陣は既に敗れたか？」と、児玉党に感謝したかどうかは書いて無いが、部下に退却を命じ平家軍は我れ先に戦場を離脱したのである。

そうした中で越中前司盛俊は平家の総大将・宗盛の命により鶴越の麓に当る山手の侍大将として能登守教経に付けられていた。（巻第九「老馬」）

平家軍が負ける中で退く機会を失い、今となつては逃れられないと覚悟を決めて馬を止め、敵が来るのを待つていた。其処に源氏軍の猪俣小平六則綱が「良い敵を見つけた」と馬を走らせて来て、いきなり組んで来たので二人は馬から落ちた。

猪俣は関東八か国で知られた剛力の武士であり例えば鹿の角の枝別れ部分を簡単に引き裂くことが出来ると言われていた。越中前司盛俊のほうも二、三十人力のように見えるけれども、実際には六、七十人で扱う舟を一人で浜に押し上げるほどの大力を備えていた。その為に猪俣は抑えられて動くことが出来ず、下から刀を抜こうとしても指が動かせない。何か言おうとしても声が出せずにいた。既に首を斬られるところであつたが剛胆な人物なので暫く息を安め、さり気無く「そもそもお互いに名乗りをしていなかった！敵を討つ場合には自分も名乗り、敵も名乗つてこそ首を取つても手柄になるのに此の俣、私の首を取つても誰だか分らなくては困るでしょう…」と言い出した。盛俊も、言われて見れば其の通りであると気が付き「私には、もとは平家の一門で在つたが身の不肖に依つて今は身分が家臣になつてゐる越中前

司盛俊と言う者である。そなたは何者であるか。名乗りを聞こう」と正直に答えた。中央政界に通じた武士ならば越中前司が高官だと分かるのだが一介の地方武士に過ぎ無い猪俣は知らないから、見栄を張るつもりも有って胸を張り「武蔵国住人・猪俣小平六則綱」と名乗ってから「…良く考えてみると（失礼ながら）源氏は強く、平家は敗色が濃いように思われる…武士は主君が時めいていればこそ敵の首を取っても手柄になり、褒美にも与（あずか）れるのでしょうか、既に主君の居ない此の場所で私の首を取っても仕方が無いでしょう。此処は理を曲げて私を助けてくれれば、貴方の一門が何十人居ても、私の勲功に替えて助命出来ます！」と、交換条件を切り出した。

是を聞いた越中前司は憤然として「此の盛俊、身は不肖なれども平家の一門である。源氏に助けを乞うような真似はしない。源氏の武士もまた、平家の武士である私に命乞いをしようなどとは思わないであろう。憎いことを言う奴」と、猪俣の首を斬ろうとした。慌てた猪俣は「…何と不都合なことをなさる。降伏した者の首を斬るのですか！」と叫んだので、越中前司も「それならば助けよう…」と、一旦は組み伏せた猪俣を助けた。二人は合戦を止めて、少し水が残る水田の干上がった畦に腰を下ろし休息をした。

暫くすると黒革の鎧を着て白色系で少し赤みの毛色をした馬に乗った武士が只一騎で近寄って来るのが見えた。越中前司は身構えたのだが、猪俣は「あれは私の親しい武士で人見四郎と申す者です。私が居るので来ただけです（私が事情を話しますから）心配は有りません」と言いながら心中では「人見と二人で組めば越中前司を討てる！」と計算していた。人見が十メートル程の近くに寄り、

それを前司が見ている僅かの隙に猪俣は立ち上がり、相手の鎧の隙間に太刀を刺し通した。

前司は刺された勢いで水田に倒れたが、起き上がろうとする前に、猪俣が前司の鎧の垂れを上げ相手の太刀を何度も刺し通してから首を取った。人見はそれを見ていたのだが、猪俣は功名争いが起きることを案じて太刀の先に前司の首を貫いて高く掲げ「平家陣で日頃から鬼神と謳われている武將の越中前司盛俊をば、猪俣小平六則綱が討ち取ったぞ！」と大声で名乗りを上げた。

冷静に見れば卑劣な振る舞いであり、史書に依つては卑怯者とされているが、是が其の日の高名（殊勲第一に記録された。ただし経緯が平家物語に記録されているので、後世の人々は猪俣小平六則綱を良くは思わなかった筈である。後白河天皇が平家一門を騙した後なので地方武士の小業は許されたのかも知れない。

忠教最後（ただのりさいご）のこと

巻第七「忠教都落」に登場しているから顔馴染みの人物である。繰り返すようだが平家一門では官位が低く、此の章段で最後を迎えるのに薩摩守の俣なのは気の毒のような気もするが平家物語に最後が記録されただけでも良しとする他は無い。

「忠度」と書かれることが多い此の武將は一の谷の合戦で西（搦め手）須磨付近の陣営を護る大將軍に任命されていた。其の日の出で立ち紺色錦織りの直衣（したたれ）に黒系統の鎧を着用して丈夫そうな黒馬に乗っていたというから武士としての最後を覚っていたのかも知れない。馬の鞍も漆で金銀の粉を塗り重ねた豪華なものである。

合戦が続く中で優勢な源氏軍の為に百騎程の勢が囲まれてしまったが少しも慌てず、追いかける敵と戦いながら退路を探しているところに源氏軍の猪俣党武士である岡辺六弥太忠純が大將軍を見つけたとばかり馬に無理をさせて走り寄った。乱戦の中であるから念の為に「失礼ですが、どなたですか？どうか名乗ってください！」と言ったので、忠教は適当に「此の軍勢は味方である…」と答えて顔を上げた。それを岡辺が見ると歯を黒く染めているのが分かった。経済的に貧しい源氏系の武士は白い歯をわざと黒くするなど無駄な事はしない。これは公家化して贅沢な暮らしをする平家一門の武士に違いない！と思った六弥太は、いきなり忠教に組み付いてきた。平家軍の兵たちは其れを見たのだが、諸国から駆り集められた者たちであつたから、誰一人として大將を救おうとせずに我先にと逃げ出してしまった。

忠教は六弥太に「憎い奴だな…此方が味方だと言ったのだから其れを信じれば良いではないか！」と言いながら相手になった。忠教は平清盛の末弟（異母弟）で紀州熊野出身とされる。他の平家一族と違って柔弱ではない。熊野山中で鍛えて大力の上に敏捷な武將である。太刀を抜いて馬上から六弥太を二度刺して、さらに落下地点でサーブスに一刺した。最初の二刺しは鎧を通らず三度目が兜の内側を傷付けたけれども致命傷にはならなかった。それを押さえ付け首と分別しようとしたところに、六弥太の家の少年兵が駆け付けて来て太刀を振り下ろした。

不意を突かれた忠教は右腕を肘から斬り落とされた為に「今は是まで」と覚悟を決め、抑えていた六弥太を片腕で二メートルほど放り投げてから相手の少年に「其処をどけ！念仏を唱える…」と

言つて、その場で西（西方浄土の方角）に向かい大声で「光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨」（こ
うみょうへんじょうじつぽうせかい、ねんぶつしゅじょう
せつしゅふしや〓阿弥陀仏の功德を称える廻向文）を唱
えた。

功を逸る岡辺六弥太は、その念仏が終わらない
うちに忠教の首を打ったけれども、相手が誰なの
か肝心な事が分からない。豪華な鎧を着ていたか
ら身分の有る武将らしいことは推測できるのだが
：其処で身に着けて居た簾（えびら〓矢壺）を見る
と文が結んであり、それを開いて見れば「旅宿花」
と題して「：行き暮れて木の下影を宿とせば花や
今宵の主ならまし 忠度（忠教）」と書かれていた
ので薩摩守忠度と分かった：と平家物語には書いて
あるが、武骨者の関東武士が其れだけで分る筈
が無く「源平盛衰記」には忠度が身に着けていた
巻物（歌集）を源氏の陣中に持ち帰ってから物知り
な武士が居て分ったように書いてある。

いずれにしても六弥太は平忠度を討った訳であ
るから殊勲第一であり、少し遅れたけれども「：
日頃から平家の御方で勇名を誇られた薩摩守殿を
岡辺の小弥太が討ち取った！」と改めて名乗りを
上げた。通常ならば源氏の陣中は湧き返る筈なの
だが「：ああ！お気の毒なことである。武芸にも
歌道にも優れた大將軍が亡くなられたか！」と涙
を流して惜しむ声が多かったのである。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡 13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-keze.com/>

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは右記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター等で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・ 打田 昇三…打田昇三全集（全 6 巻）、
歴史の嘘、私本平家物語、
私本将門記他
- ・ 兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、
ふるさと風のことば他
- ・ 伊東 弓子…風の景他
- ・ 小林 幸枝…風に舞う他
- ・ 菅原 茂美…遥かなる旅路（1、2）
- ・ 木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ
（全 24 巻）
石岡地方のふるさと昔話、
茨城のちょっと面白い昔話
他
- ・ 白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、
霞ヶ浦の紅い鯨、
朗読/ふるさと物語…他

ふるさと風の会編集事務局 〒315-0001 茨城県石岡市石岡 13979-2 TEL 080-3125-1307（白井）